

沿革

修学院の名は、10世紀後半ここに修学院という寺が建立されたのが始まりであった。その後この寺は廃絶したが、地名は修学院村として残った。修学院離宮は桂離宮におくれること約30年、1655年に後水尾上皇によって造営工事が起こされ、1659年に完成した山荘である。幕府との間に緊張が続いた時代であっただけに、これほどの大規模な山荘を短期間に完成したことは驚きである。広大な敷地に短期間で造営できたのは、上皇の妻が徳川家康の孫、秀忠の娘(東福門院)だったからである。

なお、中の茶屋は当初この山荘にはなかったものであるが、上皇の第八皇女元瑤内親王(朱宮)のために建てられた朱宮御所に東福門院(後水尾上皇の皇后、将軍徳川秀忠の娘和子)亡き後の女院御所の建物を一部移築して拡張した。上皇崩御の後、元瑤内親王は落飾得度してこれを林丘寺とした。明治17年林丘寺門跡から境内の半分(楽只軒、客殿)が宮内庁に返還されたので、中の茶屋とした。

庭園

比叡山の麓、東山連峰の山裾に造られた修学院離宮は、上・中・下の三つの御茶屋(離宮)からなり、上離宮背後の山、それに三つの離宮を連絡する松並木の道と両側に広がる田畑で構成されている。総面積54万㎡を超える雄大な離宮である。上皇は退位されてから十余年、離宮の造営に向けて各地を涉猟された。その結果東山連峰の山裾で水の流れがあり、北山、西山、洛中が一望できる、この地に自然と融合した理想の世界を作り上げた。

- ・下の茶屋: 現在は寿月観の周りに遣水と滝がある。
- ・中の茶屋: 楽只軒と客殿の周りに遣水、二つの滝、池がある。元が皇女の御所であっただけに最も華やいでいる。
- ・上の茶屋: ここが最も離宮らしく、上皇が理想とした世界である。山腹に大刈込と呼ばれる三段の生垣で覆われた堰堤を築き、離宮の南側を流れる音羽川の水を引いて雄滝、雌滝などの滝を落とし、中島の浮かぶ浴龍池と名づけられた大きな苑池の回遊式の大庭園である。
- ・苑路には多くの灯籠があり、これから行くべき方向の足元を照らしていて、自然美の中に人工的な美を加えている。



燃える紅葉



夕日が西山に落ちるときには浴龍池は赤く燃え上がる。この景色こそ上皇が望んだものだ。



下の茶屋と上の茶屋を結ぶ松並木



上の茶屋の隣雲亭より浴龍池と千歳橋







